

博物館だより



No.147

平成31年2月1日

みやこ町歴史民俗博物館発行
福岡県京都郡みやこ町豊津1122-13
TEL 0930-33-4666
FAX 0930-33-4667

◆博物館NEWS ①新たな地域文化の創造を支援 愛郷音楽祭へ 館員フル出場!

郷土出身の音楽家 里見義・高橋信夫の顕彰記念行事「愛郷音楽祭」に、博物館職員が初めて総出演等、協力をさせていただきました。

今年の音楽祭番組のうちオペラは、胸の観音伝説に取材した「SANA E」。館員は地域の伝統文化を活かす取組の足しになればと慣れない声楽や演舞にチャレンジ。仕上りは別にして音楽祭は大盛況で何よりでした。



▲「SANA E」のワンシーン。実は声楽隊、小松ヶ池の龍、龍を退治するスサノオを館員が担当しましたが、こんなことは初めての冷や汗ものでした。



▲館員の説明に耳を傾けてくれる伊ッセー尾形さん。館のリニューアル後、この資料の閲覧を目的に訪れた芸能人は伊ッセーさんが初めてです。

②上演前にイメージ・ロケハン 伊ッセー尾形さん、 漱石資料を閲覧

先日行われた「みやこの座・妄ソセキ劇場」の演者・伊ッセー尾形さんが準備作業のため12月26日に当町を訪れた際、当館所蔵の漱石資料(書画・写真等/小宮豊隆資料のうち)を閲覧になりました。館内燻蒸のため、図書館での閲覧でしたが、上演作品に関する情報を貪欲に吸収しておきたいという演者の姿勢が伝わってきました。

第13回「みやこ町三重塔まつり」開催!



▲昨年の三重塔まつりの様子

みやこ町に早春の訪れを告げる名物行事「みやこ町三重塔まつり」が今年も開催されます。梅の香ただよふ春の国分寺境内で子どもたちの感性豊かな俳句を愛でながら、句会や野点、護摩焚きなどを体験できる多彩な催しが用意されています。ぜひお誘い合わせてお越し下さい。日時：2月24日(日) 10時～15時 場所：豊前国分寺跡公園(みやこ町国分地区)

◆講座・教室・催し物ガイド 2月の歴史講座

- 【漢詩紀行講座】
2月2日(土) 9時30分～
 - 【古文書講座】
2月9日(土) 10時～
 - 【古典かな講座】
2月16日(土) 9時30分～
 - 【みやこ学講座】
2月23日(土) 10時～
- ※日程等変更となる場合があります。
※見学会等は別途ご案内します。

博物館・友の会共催事業 歴史たんけんウオーク 参加者募集!

博物館では友の会と合同で「早春の城井谷ウオーク」と題した史跡散策を行います。舞台は「戦国のムラ・城井谷」で、豊前宇都宮氏ゆかりの遺産を歩いて見学します。ふるつてご参加下さい!
日時：3月10日(日) 9時～13時
場所：蔵内邸(夫徳寺・築上町)ほか
定員参加費：20名(先着順)・200円
※申込・問い合わせは博物館 ☎3314666まで。
※定員となり次第、締め切ります。

★まつりメニュー&スケジュール ○午前の部

- ・開会行事
 - ・少年少女俳句優秀作品表彰式
 - ・句会(成人の部/国分公民館)
 - ・出店(野菜・加工品・豚汁等)
 - ・野点(文化協会/有料)
 - 午後の部・護摩焚き行事など
 - ・山伏問答など(13時～)
 - ・火渡り(14時30分～)
- ※出店や野点等は午後も行われます。
※問合せは博物館 ☎3314666へ。
※雨天の場合は内容等変更して行われます。

12月の業務日誌から

16日(日)、みやこ学講座の見学会が行われ町内外の「明治150年」ゆかりの近代化遺産めぐりを行いました。犀川駅ホームの基壇や五徳架道拱梁(崎山)など、身近な風景に明治が生きていることを確認しました。

22(土)、九州国立博物館から「きゅーはく女子考古部」の皆さんが、みやこ町の古墳見学に訪れました。いわゆる「歴女」「古墳女子」の皆さんで、普段とやや勝手が違う案内に、学芸員も嬉しいやら戸惑うやら…。



▲女子部の皆さんを橘塚古墳と綾塚古墳へご案内しました



▲生活道路をまたぐレンガのトンネルは明治の鉄道遺産でした

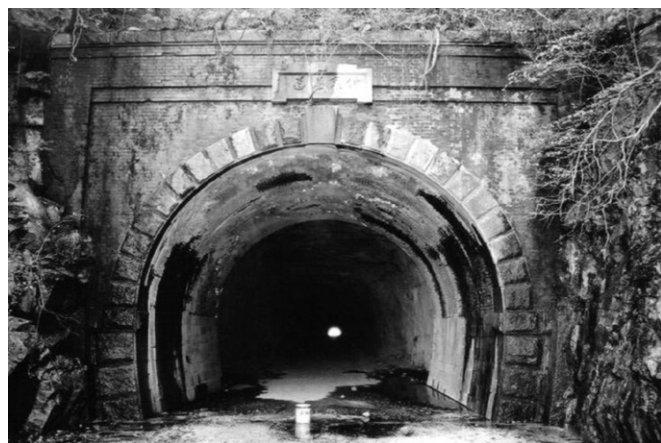
みやこの歴史発見伝 113

よしだますぞう 吉田増蔵(そのと)

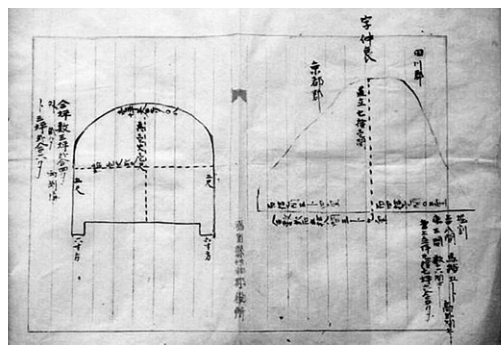
「漢学者」森鷗外について①

明治の文豪と元号

当館所蔵の「小宮豊隆資料」に代表される「夏目漱石」ともに明治を代表する文豪として多くの人々に親しまれている人物が、森鷗外（本名は森林太郎）です。彼は本来の役職である陸軍軍医を勤める傍ら、小説の執筆を行い、また評論家、翻訳家や、医学・文学博士など



▲仲哀隧道(落石等のため現在は通行不可)



▲仲哀隧道設計略図

て不可欠な「元号考」の作成に携わったことは、あまり知られていません。今回は、この明治を代表する文豪が関わった元号考案作業を通して見えてきた吉田増蔵やみやこ町との関係についてご紹介いたします。

森鷗外がみた仲哀隧道

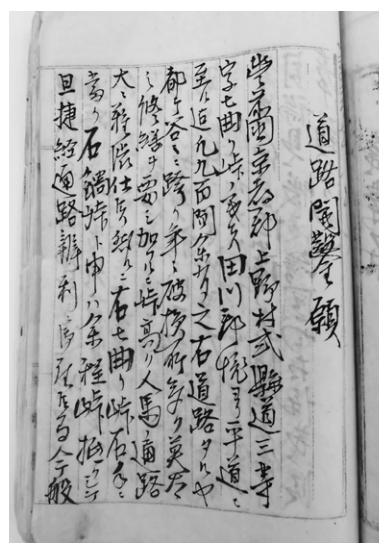
森鷗外は、一八九九年（明治三十二）六月から小倉の陸軍第十二師団軍医部長として赴任。それから三十五年の三月まで、二年

様々な分野で活躍し、功績を残した人物です。これとは別に、漢学者として研究活動を行い、特に晩年は吉田増蔵の上司として大正に次ぐ元号を考案する際の考証資料として

不可欠な「元号考」の作成に携わったことは、あまり知られていません。今回は、この明治を代表する文豪が関わった元号考案作業を通して見えてきた吉田増蔵やみやこ町との関係についてご紹介いたします。

九か月間、小倉に滞在しています。この時期の様子については、彼の「小倉日記」に詳細な記述がみられますが、明治三十四年（一九〇一）の頁に「七月四日雨。午前七時行橋を発し、午にちかづきて七曲嶺を踰ゆ。隧道あり。」とあります。これは一週間に及ぶ師団衛生隊の夏季機動演習で行橋から香春に向かう際、現在のみやこ町勝山松田に位置する仲哀隧道（国登録文化財）を通ったという内容ですが、その際、「雨に啼く鳥は何鳥若葉蔭」という句を詠んでいます。隧道に通じる道は現在、桜の名所として知られていますが、この周辺の峠道は、古代から京都郡と田川郡を結ぶ交通の要衝であり、明治時代に入ると、近代化に伴って燃料・建築資材として需要が高まった筑豊地域で産出される石炭・石灰輸送のスピード化が急務となりました。これに伴って京都郡・田川郡の共同事業として隧道の掘削が行われ、六年八月に及ぶ工事を経て、明治二十三年（一八九〇）十月に長さ四三二m、幅三・六m、高さ二・七mの隧道が完成しました。名称はこの地に伝わる仲

九か月間、小倉に滞在しています。この時期の様子については、彼の「小倉日記」に詳細な記述がみられますが、明治三十四年（一九〇一）の頁に「七月四日雨。午前七時行橋を発し、午にちかづきて七曲嶺を踰ゆ。隧道あり。」とあります。これは一週間に及ぶ師団衛生隊の夏季機動演習で行橋から香春に向かう際、現在のみやこ町勝山松田に位置する仲哀隧道（国登録文化財）を通ったという内容ですが、その際、「雨に啼く鳥は何鳥若葉蔭」という句を詠んでいます。隧道に通じる道は現在、桜の名所として知られていますが、この周辺の峠道は、古代から京都郡と田川郡を結ぶ交通の要衝であり、明治時代に入ると、近代化に伴って燃料・建築資材として需要が高まった筑豊地域で産出される石炭・石灰輸送のスピード化が急務となりました。これに伴って京都郡・田川郡の共同事業として隧道の掘削が行われ、六年八月に及ぶ工事を経て、明治二十三年（一八九〇）十月に長さ四三二m、幅三・六m、高さ二・七mの隧道が完成しました。名称はこの地に伝わる仲



▲仲哀隧道道路開鑿願

「漢学者」森鷗外との出会い
その後、森鷗外は、陸軍省医務局長を最後に軍務から離れ、大正六年（一九一七）十二月に帝室博物館（現在の東京・奈良・京都国立博物館）総長に就任し、翌年十一月には正倉院宝庫開封作業の立会のため奈良に一時滞在します。以後大正十年（一九二一）まで毎秋、奈良を訪れています。この時、奈良女子高等師範学校（現在の奈良女子大学）で教鞭を執っていた吉田増蔵を知る事になります。交流を重ねる中で偶然にも増蔵と

哀天皇の伝説に由来するものです。この隧道は、有事の際には軍事的利用という側面も兼ね備えていましたが天井が低く、騎馬兵の頭をかすめる程であったため、軍部の要望もあり大正十四（一九二五）年以降、数回の拡張工事が実施されています。

「養老館」で漢詩文を学び才能の高さを広く知られた存在であったと伝えられています。水哉園出身で、既に上京していた兄健作や、その親友であった末松謙澄（後の内務大臣）などの推薦もあったとみられ、増蔵は、大正九年（一九二〇）十月に、宮内省図書寮（現在の宮内庁書陵部）の編修官となります。図書寮は天皇・皇族などの実録の編修などを行なう部局で、その長である図書頭が森鷗外でした。これ以降、増蔵は森鷗外が最も信頼を寄せたパートナーとして元号考案作業を手伝うことになりました。漢詩文の作風もさることながら、二人を強く結びつけたものは、三十九歳の鷗外が見た仲哀隧道をはじめとした増蔵の故郷「みやこ町」のなつかしい思い出の風景であったのかもしれません。

鷗外の漢詩文の作風には多くの類似点が見られ、次第に、その学識の高さが認められていったものと推察されます。鷗外もまた増蔵同様に、幼少期から藩校

【井上信隆】